

助産学における専門用語の修得について

—助産学英语表現法の授業研究—

To Master of the Technical Term in Midwifery Study -Research on Teaching of English Expression Method in Midwifery Study-

鈴木 由美

要 約

専攻科学生の背景やその構成比は毎年異なる。助産学英语表現法の講義を担当して筆者は2年目になるが、1年間で33単位を習得する助産師学生にとって英語を学校で学ぶだけのゆとりは到底なく、その必要性を感じられないとき学生の意欲低下をもたらすと考えた。これまでの専攻科卒業生の経緯をみても、英語が受験科目にある大学院を受験することもなく、そして受験するとしてもそれに見合った英語力がつくだけの内容は7回の講義では無理である。

したがって医学英語に親しむためのきっかけ作りになると考えた。少ない講義時間の中で英語力や学習背景の異なる学生が最大公約数的に英語を自分のものにする目標が、医学用語を理解することであった。

そこで今年も昨年に続き、事前調査を行い学生の背景を考慮したうえで7回の講義を実施し、今年度は学生のコメントを寄せ、次の講義の修正にあたった。

今回はこの経過について振り返り、考察を深めた。

キーワード：助産学、専門用語

緒 言

助産学英语表現法を担当するようになって2年目であり、昨年度から英語を学ぶよりは助産学に必要な専門用語を学ぶ内容となっている。わずか7回の講義でありながらも、学生が過密な助産専門科目の合間を縫って講義予定を組むため、学生にとってそれなりの成果や評価が得られる内容でなければならないと考えてきた。そのためには土台の異なる学生に対して7回の講義で高いところに目標を置くよりも、実践的なことが必要最低限確実なものになることが大切であると考え、授業展開をしてきた経緯がある。福井¹⁾は言語材料は孤立した要素や素材だが、題材はそれらを有機的に配列した組織であるといい、目標を達成するのにふさわしい言語材料や題材を含んでいるかどうかだけでなく、必要なさまざまな学習活動に適するかどうかを重要だと述べている。このことから助産学英语のシラバスの中には「看護・助産領域では特殊な医療用語が頻出する。この講義

では領域に頻出するカタカナ表記語、動詞、名詞、形容詞の表現法などをゲームやグループワークを通して理解できるようにする。すなわち、実習などにおいて最低限のカルテ英語が読めること、そして英語表記されている説明文などが分かることを最終目標にする。」とした。専門職として認識すべき用語が理解できることが最終目標ではあるが、専攻科の学生においては毎年学生の背景が異なるため、昨年度より事前アンケートを行うことにした。今年度も同様に講義開始前に学生の関心、到達目標、外国人に対する印象、英語学習の経緯、現在の能力（自己評価）などについて詳細に5段階評価で事前アンケートを行うことにした。

方 法

平成18年6月9日～7月21日の講義7回につき、5月に事前アンケート調査を行い、学生の背景を把握した。及び今年度は講義における毎回終了時の学生の感想、コメントなどを必ず聴取し、それに基づき本来の講

義予定に多少の修正を加えた。7回の講義を通しての経過を追い、講義展開とその結果をまとめることにした。

対象者は平成18年度専攻科入学生17名。

倫理的配慮として、事前アンケート、授業後のアンケートは全て成績には無関係であること、拒否権、回答の自由などについては口頭で、およびアンケートの冒頭に明記した。

結 果

1) 事前アンケート調査による学生の背景

今年度の学生の背景は、年齢は20歳～46歳までで、背景は看護系大学卒業生1名、福祉関係大学卒業生1名、看護系短期大学卒業生5名、他は看護専門学校卒業生でそのうち2名は2年過程卒業生である。アンケートの内容は50項目でそれぞれ1「思わない」(そうではない) 2「あまり思わない(あまりそうではない)」 3(どちらともいえない) 4「思う」(そうである) 5「かなり思う」(かなりそうである)の5段階で回答する形式とした。詳細な内容は別紙の通りである。

外国語に興味がない学生は2名、英会話であれば半数以上9名が4「思う」5「かなり思う」(以下数字のみで表記)で回答していた。CD,外国に行くことなどについても同様に半数以上に興味関心があった。一方で英語の文献を読むことについては半数以上が1か2と回答しており、英語を使って仕事をしたいなどについても2を含めて半数が思っていないことになる。到達目標は一般、専門なども含めて半数以上が文章を読めることを望んでおり、書けることが目標となるとクラスの三分の一程度が望んでおり、3を含めると望まないと言われる学生が12名であった。しかし外国人とのコミュニケーションや海外旅行で困らないという項目になると、半数以上が望んでいた。このことは英会話に対する希望がクラスの半数以上であったことに起因すると思われる。

英語のイメージとして仕事ができそう、評価されるなどの利点については10名以上が認めていた。また外国人についての抵抗は強いものが半数以上であり、居住地域に英語圏の外国人が少ないことで、接する機会が少ないことなどが考えられる。

英語学習の経緯については、クラスの三分の二程度が高校までの英語を苦手と回答しており、その一方でもともと興味があるものは4も含めれば10人いた。受験科目に英語がない助産師学校を受験したものは約半数であるものの、助産師学校で英語を必要

ではないと考えるものは少なかった。現在の能力として、挨拶程度の会話と回答したものが半数以上、検定やTOEICなどを受験したものが12名もいた。

2) 7回の講義内容と学生の反応

昨年度は飯田恭子著のカレントメディカルイングリッシュをテキストにしたが、活用度や到達目標からみて今年度は同著者の看護カルテ用語辞典を用いることにした。

またアメリカの医学書Kevin P. Hanretty Obstetrics illustrated教材作りの際に参考とし、その名の通り、イラストが多い医学書であるため、助産を学ぶ専門知識の学習途上段階にある学生が、英語の知識よりもむしろ専門知識で解釈が可能な媒体を作成した。

学生の授業評価は最終回時に実施され、その結果は即座に分かるわけではないため、学生のニーズを反映させるために2回目の講義より、感想、コメント、要望などについて自由記載してもらった。これを参考にして予定講義内容の修正を試みた。学生の背景などを考慮すると、7回の講義では最大公約数的な目標にする方が無理のない方法だと考えた。

(1) 第1回ことはじめ：習熟度とニーズの検討も含めたガイダンス、カタカナ語の国籍について1例をあげると以下のようなものである。

Q ここは病院です、さて次の部門はどこでしょう？

Nutrition department labor room pediatrics obstetrics emergency room medical office

Correct answer：栄養課，陣痛室，小児科，産科的，救急室，医局

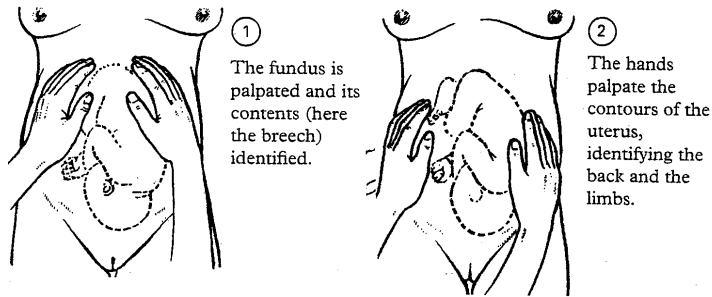
聞いたことがあるカタカナ用語が何語であるかを分類させる問題、カタカナ用語を英語で表記するとどうなるか、また病院で働く人々(コメディカルなど)、病名、症状、検査や処置などについて触れた。飯田²⁾によれば臨床現場では看護師-医師、看護師同士、カルテや看護記録などコミュニケーションにおいてドイツ語や英語を語源とするカタカナ略語が頻繁に用いられており、困惑する看護職が多く、調査結果を行った結果、それらの60～90%近くにカタカナ語、略語が多用されている現状があり、意味がわからない、職場によっては使用法が異なるなど臨床経験平均5年の看護職のほぼ全員が困った経験をしていた。またもっとも高頻度のカタカナ語100語についても、正しい知識の無いまま使用され、ドイツ語由来か英語由来かの判別ができないものもいたという。このことから、最初の講義でそれらの意味や語

源の判別をさせておくこととした。

そして最後は産婦人科で使われる用語 (fundus, menopause, neonate, など) に焦点をあて、第2回の産婦人科的な内容への導入とした。

(2) 第2回 妊婦の診察

学生が学習済みであるレオポルト触診法の図から始まり、妊婦健診における診察の方法、妊娠の経過と必要な検査などについて図のような教材を用いた。



Kwvin.P.Hanretty, Obstetrics Illustrated, Churchill Livingstone, 2003 p.76 より抜粋

(1) (2) までの感想は以下の通りであった。いずれも複数回答で「産科で使う語があると楽しくなる」「久しぶりの英語で頭の体操である」「今まで学んだこと (助産学) を英語で表現するという発見が楽しい」「グループワークなので協力できた、助かる」「英会話をやりたい、話せるようになりたい」「授業の資料と辞書の往復で大変」「講義の進みについていくのがやっと」「カルテにある用語は最低限覚えたい」「授業で覚えるのは難しい」「覚えるべき単語が多くて心配」などの意見がみられた。

(3) 第3回 パルトグラムを読もう

昨年度と同様にパルトグラムを示し、admission (入院) onset of labor (陣痛発来), rupture of bag (破水) などが表記してあり、それらを読み取れることを学習目標としている。パルトグラム上の医学用語は、実際にカルテなどに表記されているものが多いといえる。

3回目以降は専門書の訳などをグループワーク (グループは毎回異なるメンバーで構成) で行ったため、以下のような感想がみられた。「長文には苦戦する」「単語が思い出せない」「調べてもニュアンスで訳している」「知識があれば訳せるといった」などである。そして「英文を訳すよりは単語を扱って欲しい」というコメントが複数みられた。

英文和訳は学生にとって負担であり、概して単語が分かることがやっとという印象であった。また

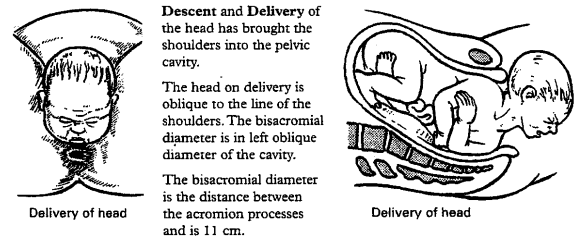
「ひらがなで読み方を書いて欲しい」というのもあった。しかし依然として「英会話をやりたい」という意見が複数みられた。

分娩介助手順について専門書の訳文をグループで訳すなどの方法をとってきたが、多くの学生は英語の知識よりも専門知識で想像して解釈しているようであった。

(4) 第4回 お産の経過について考えよう

NORMAL LABOUR

THE MECHANISM OF LABOUR



Kwvin.P.Hanretty, Obstetrics Illustrated, Churchill Livingstone, 2003 p.231 より抜粋

この講義を行ったのは7月であり、学生はちょうど分娩介助技術を学んでいる時期にあたるせいか、英語力というよりも専門知識で読破することができた。医学書の文章を読ませるよりも、キーワード或いは見出し語をグループで和訳させた。それでも大多数の学生にとっては英語を和訳することが負担であるという感想が多かった。

高等学校までの英語が苦手であると回答したものが7割程度いたことが反映されていることになる。

4回目よりtea breakとして、医学英語には関係なく日本の文化や食べ物などについてBun (饅頭) red bean jam (あんこ) rice ball (おにぎり) など英単語を並べ、学生に当てさせるクイズ形式の時間を作った。その結果4回目の講義の感想においては「最後のtea breakが面白かった」「このくらいなら訳せる」「もっとやってほしい」などという意見が多数みられた。

(5) 第5回 産科的における英会話

Dr.Shimizu: When did labor begin?

Patient: At 8:00 PM, last night.

Dr.Shimizu: Is this the first time?

Patient: That's right.

高階経和, 木下佳代子, G.Barrachough, B.M.Ph D, 看護学会のライセンス, 第3版, 医学書院, 1995, p110-113より抜粋

中学校卒業程度の英語を扱い、むしろ簡易な英語でも十分なコミュニケーションが取れることを目標

とした。それぞれの学生にロールプレイをさせて質問に回答する形式をとった。最初はグループワークで次第に2人組みとして会話の練習を行うことにした。

(6) 第6回 外来や電話の対応の英会話

Receptionist: Hello, this is the Tokyo International Medical Surgical Clinic. May I help you ?

Mrs. Anthony: Yes, is there an English-speaking obstetrician on the staff?

仁木久恵, 助川尚子, N.Engel R.N.Bch, 臨床看護英語, 新訂, 医学書院, 1995, p50-52より抜粋

この回では和訳をつけなかった。ここでは2人組となって会話を行うことにした。

5, 6回目に学生にニーズを反映させて英会話を取り入れた結果, 「今回程度のレベルの授業がよい」「ゲームを取り入れて欲しい」「会話になるとやはり苦手意識が出てしまった」などであるが, 「楽しかった」などの意見が多数見られた。それ以上に多かったのは「ビンゴなどのゲームをやりたい」という意見であった。

(7) ゲーム (最終回)

学生の要望もあり, 最後にゲームなど遊びの要素を取り入れた講義を希望する声が多かったため, 日本語読みをした英語を探すゲームやクロスワードなどを考えた。

例) Full it care, cowards to become, me do not.

これは松尾芭蕉の「古池やかわず飛び込む水の音」を英語でもじったものである。このようなクイズを中心に最後の授業を締めくくった。

最終回の感想は次のようであった。「英語が苦手な嫌いだだったが, 楽しかった」「クイズ形式だったので苦手な英語が楽しかった」「沢山の産科用語, 医療用語がわかった」などの意見が多数得られ, 「産科の単語や病院で働くときのために英会話の参考書を買った」「これからも英語をやりたいと思った」などの意見も複数あった。

考 察

1) 講義の振り返り: 昨年と同様に事前にアンケートを行ったこと, 及び今回は毎回学生のニーズを把握することにしたことで, 学生の抵抗が小さく講義に臨めたのではないかと考えられる。小川, 山家ら³⁾は英語の教授法と諸要素の条件としてそれらを十分

考慮しないで取り入れることは危険であるとし, その考慮すべき主要なものは, 母国語と外国語の相違点, 目的 (何のために外国語を習得するか), クラスの大小 (構成人員), 生徒の質, 教師の質, 時間数などによって教授法が変わることを述べている。従って事前にアンケートを行い, 学生の英語学習への姿勢, ニーズなどを把握し, それにしたがって与えられた時間内で目標が達成できるように指導案を作成することが要求される。このことは背景の異なる学生が毎年同率で入学してくるわけではない専攻科の場合, 毎年行うべきことだと思われる。

学生は助産の専門科目を含めて殆どが必修科目の33単位を取得する中で「助産」という文字がつくとはいえ英語は専門科目には無関係のものとして重要視していないのではないかと危惧していた。そのため多くの内容を詰め込まない予定ではあったものの, 時には時間が足りず, 学生の思考に頼らず此方で回答を示すなどのお膳立てをするような部分もあったため, 今後は本当に必要なものだけを抽出することが大切だと考えた。

また専門書を用いることで, 一旦は学生の興味や関心を引いたものの, 媒体が英語であることで苦勞している学生も半数以上みられた。しかし, 逆に媒体が英語でも専門分野で習ったばかりの新鮮な知識であるため, 多くの学生が想像力を働かせることができたと考える。

学生の感想なども踏まえると, 外国語学習ではなく専門用語学習であり, その媒体としての英語なのである。したがって発音については一切触れず, それゆえにカタカナ読みを奨励し, 英語を見て日本語で意味が分かればよいというレベルに最終目標を設定した。従って専門的な内容の教材を用いることが不可欠で, 学生も助産を学ぶ中途段階にあるため, 学習内容が英語の世界に登場することで, 自分たちの助産の知識を再確認するような運びとなった。本来英語力がない学生でも, 助産の知識から想像して英語を解釈することができたのである。

ティブレイクでの息抜きについて, 学生の反応は最も良好でそれに見合った感想が多かった。助産師の教育課程は33単位がほとんど必須である中で, 学校によっては英語は選択科目であり, 本来修得しなくても卒業できる意味合いから考えるといわゆる息抜き科目だと考えることができる。したがって学生の緊張を緩めることが必要で, それによって楽しみながら学べるのではないかと推測した。

2) 今後の展望：今回の授業で目標とした「カルテ用語が読めてわかること」については、学生が実習に出て成果を見ない限り、到達したかどうかはわからない。しかし一度は習ったことがあること、学習の方法、思考過程などが思い出されることを期待する。

飯田4) はカタカナ語に関する基礎教育の必要性を説いており、日本にのみ固有の表記語は国際的に通用せず、まして原義を理解しないまま使用されることは国際共通であるべき看護の用語・概念・理論の正しい習得の妨げであるとしている。国際社会のける看護職の条件についても、真の意味でのbilingualであること、contributor の役割を果たす国際人であること、グローバルに通用するprofessional であること、多領域・多文化圏における柔軟なcollaborator であること、国際社会で自己管理する Risk Manager であることをあげているが、7回の講義では到底そこには追いつかず、国際社会である前に地域に根ざした看護職であることから始まると考えれば、当学専攻科における看護職に求められる英語の目標設定はおのずと見えてくるものと考えられる。

臨床における英語、略語、カタカナ用語などは、本来産科棟に向いて産科スタッフのやり取りを聴取し、カルテなどを見ることで用語の使用頻度などのデータをとることが出来れば望ましく、これは来年度も英語表現法を担当するとしたら近日中に実施したい調査でもあり、今後の課題である。

来年度は今年度とは異なる背景の学生が入学してくることは必至である。事前調査を行い、学生にニーズを把握した上で、専門分野で興味を持てる教材を工夫し、遊びの要素を取り入れながら楽しく、負担ではない講義の工夫が望まれる。

謝 辞

今回の報告を作成するにあたり、事前調査に協力してくださった専攻科学生諸君17名に謝辞を表したい。

引用文献

- 1) 福井保, 英語教室の実際, 研究社, 16-17, 1960.
- 2) 4) 飯田恭子, 看護領域の英語前編, カタカナ表記用語使用の実態, 医学界新聞, 2623号, 2005年2月28日(月).
- 3) 小川芳男, 山家保, 英語教授法展望, 研究社, 147, 1960.
- 5) Kevin.P.Hanretty, Obstetrcs Illustrated, Churchill Livingstone, 76, 231, 2003.
- 6) 高階経和, 木下佳代子, G.Barrachough, B.M.Ph D, 看護芸会話のライセンス, 第3版, 医学書院, 110-113, 1995.
- 7) 仁木久恵, 助川尚子, N.Engel R.N.Bch, 臨床看護英語, 新訂, 医学書院, 50-52, 1995.

To Master of the Technical Term in Midwifery Study

-Research on Teaching of English Expression Method in of Midwifery Study-

Yumi Suzuki

Abstract

The background and the composition ratio of the students of post-graduate midwifery students are different every year.

It was thought that acquiring 33 units in one year led to the students eagerness to study English. It was found that the acquisition of English skills in only 7 lectures is difficult. The opportunity to study Medical English was considered. The most effective way of studying English is thought the study and understanding of Medical Terminology.

After prior was investigated following last year this year and student's background was considered, seven lectures were executed, and then, the student's comment was drawn, and it undertook the correction of the following lecture at current year. It looked back on this passage this time, and consideration was deepened.

Keywords: Midwifery, Technical term